

地域通俗教育としての私塾に関する一考察

—稲城・奚疑塾を対象に—

川 原 健太郎

はじめに

本研究は、近代の一私塾を取り上げ、地域において展開された学習活動の取り組みについて、地域通俗教育としての視点から検討を行うことを試みたものである。私塾は江戸時代に多数設立され、藩の正式な教育機関である藩校以外の教育の場として、人々の学習意欲を支え教育機会を拡大してきた。私塾の種類は幅広く、武士や僧侶が指導した庶民教育、あるいは高名な学者が指導した高等教育機関として、重要な位置にあった。その後、明治維新以降近代的な学校教育制度が導入されていき、教育をめぐる状況は変貌を遂げていくが、近代以後設立された私塾も含め、私塾の一部は近代学校と並立し青年の教育機関となっていた。

本研究では、そのような明治から大正初期にかけて地域に開かれていた近代の一私塾を、地域通俗教育の視点からその役割と意義の考察を行なうことを目的とする。具体的な分析の対象として、明治から大正にかかる1880～1913年に、東京西部の三多摩地区の稲城地域に開かれていた私塾である、奚疑塾（けいぎじゅく）を取り上げる。奚疑塾を対象とする理由の一つは、奚疑塾が開設されていた稲城の地域特性である。稲城は東京近郊とはいえ都心部から離れた農村であり、立地の面からは必ずしも恵まれた環境になかったにもかかわらず、多くの塾生を集めていたことは分析する意義を十分に備えていると考えた。もう一つの理由には、奚疑塾の設立理念に教育の門戸拡大についての記述があったことから、地域の人々のための私塾という視点からの分析が可能であると考えたことを挙げられる。

1880年代～1900年代初頭の東京地域における通俗教育・社会教育の姿を明らかにした先行研究には、松田武雄による『近代日本社会教育の成立』を挙げることができる。同研究では、近代日本の社会教育（行政）の成立過程において、地域における通俗教育活動に着目し、通俗教育会、講談会、図書館や青年会など、通俗教育・社会教育の諸相の実証的な考察を行なっている。その上で、都市、農村、山村、島嶼と地域的多様性をみせていた東京地域において、時期的・地域的に豊かな実践があったことを明らかにした。松田は官製のな地域の通俗教育活動の中に、単に国家政策の浸透ではない地域の主体的な要因を見出している⁽¹⁾。

私塾は、通俗教育会、幻灯会、通俗図書などのいわゆる通俗教育とは厳密には一致しない。しかし、本研究で対象とする奚疑塾は、稲城という地域に根ざして展開した私塾であり、地域通俗教育の

視点から癸疑塾を分析することは、近代における私塾の新たな一側面を見出すために重要であると考えた。癸疑塾の実践は、近代稲城での社会教育活動の萌芽として重要性を持っていると既存の研究の中で指摘されている。ここで対象とする癸疑塾を取り上げた先行研究には、次の三つの研究を挙げることができる。第1が、渡辺賢二らを中心とする稲城市の市史研究である⁽²⁾。同研究では、癸疑塾史料を掘り起こしながら、癸疑塾の稲城における戦後への影響に関する分析を行ない、癸疑塾の文化財価値に着目している。ここでは癸疑塾の頌徳碑建立運動や癸疑塾に関わった人々の活躍から、「癸疑塾と窪全亮は、戦後の稲城や三多摩地域に有形無形の数多くの影響を残している⁽³⁾」としている。同研究は癸疑塾の姿を明らかにし、癸疑塾の持つ価値を検討した点で重要と考えられる。第2には小林孝雄による研究がある⁽⁴⁾。小林は神奈川県地域民衆史を考察する中で、創設者窪全亮の分析を行なっている。特に窪全亮の漢詩人の側面に着目し、彼の漢詩や交友関係をみることで、窪を慕い多くの子弟が癸疑塾を訪れている事を指摘している。第3は多田仁一による研究である⁽⁵⁾。多田は、多摩地域の郷学校を検討する過程で、長沼村の長沼郷学校を取り上げ、郷学校教員時代の窪の指導に触れ、在村文化や儒教の存在を指摘している。第2、第3の研究は癸疑塾の創始者である窪全亮を対象とした研究で、塾そのものの研究ではない。本研究では、こうした研究を踏まえながら、特に癸疑塾を通しての人間形成に焦点を当て、同塾が地域社会に果たした意義や役割の分析を行なっていきたい。本研究は、私塾・癸疑塾を地域における民間有志による通俗教育・社会教育として位置づけ、地域に根づいた私塾を実証的に研究する点に特色があると考えられる。本論の構成は以下の通りである。はじめに1. において癸疑塾の成立背景を明らかにする。次に2. においては、癸疑塾の教育からその意義を検討する。最後に、3. において癸疑塾の役割について考証を行ないたい。以上を通して地域における通俗教育の視点から、癸疑塾の研究を進める。

1. 癸疑塾の成立の背景

(1) 私塾教育の展開

明治期の私塾の概要は、小久保明浩の研究を参照したい⁽⁶⁾。明治期の私塾ではいくつかのタイプがある。例えば教育制度の発足時小学校に学んだ人たちが、小学校の課程以外に漢学の学習をするための塾がある。また、この時期東京への遊学熱が盛んなことから、地方から上京して来る遊学者や、小・中学生、さらに中・高等教育の諸学校への入学の手がかりを得ようとする、向上心にあふれた若者たちが東京で学んでいた塾などもあったようだ。

さらに、明治期には人間的ふれあいを持つ新しい性格を持つ塾が誕生していることを、小久保は指摘している。これらをみると、つまり、「近世の家塾・私塾と種々の点で異なった形態の新しい塾が明治期に生まれる。近世の塾は、漢学、国学、洋学といった学問を教育・研究するものとして存在したが、新塾では学問の教育を主体とするのではなく、塾を主宰する教師との人間的なふれあい、つまり何らかの人格的影響を期待しての、合宿生活が営まれた⁽⁷⁾」とある。

他にも明治期における私塾の動向の一つには漢学塾の隆盛がある。『東京都教育史』を確認すると、

1880年の文部省第八年報からは、「小学中学若クハ専門学校ノ資格に適合セザル」学校や家塾の類を「純然完備ノ学校ト甄別」するため、家塾等が含め各種学校の項「各種学校」の項目が設けられた。これからは私塾の大まかな教授内容の動向をみることができるが⁽⁸⁾、その多くは漢学を教授するものであった。

以上にみられるように、この時期の私塾ではさまざまな形態で教育が行われていたが、私塾という教育機関の性質上、どれほどの地域的広がりがあったかははっきりと知ることは容易ではないと思われる。例えば稲城が含まれていた神奈川県下における明治初期の私塾は、『日本教育史資料』八の「私塾寺子屋表」からは、11箇所を確認できる⁽⁹⁾。本研究で取り上げる奚疑塾はこれには含まれていない。公立学校の代替としての私塾もあることから、当時の郷学校なども含め幅広い分野から私塾をみていくことが重要であると考えられる。

(2) 奚疑塾の成立背景

次に、奚疑塾の背景である稲城及び教育の概要を取り上げる。稲城は、東京都心部から西南に位置する旧南多摩郡の東端に位置する地域である。『東京府統計書』から南多摩郡、北多摩郡、西多摩郡の1893年から1908年の人口増減をみると、奚疑塾の活動期に三多摩全域で大きな変動はみられない。この傾向は東京市部との比較でも市部が約1.70倍に対して、三多摩合計では約1.19倍にとどまっている⁽¹⁰⁾。多摩丘陵が土地の多くを占めていることもあり、稲城が含まれる南多摩の地域全体の主産業は農業であった。稲城では、農家が80%ほどを占め、多くは農業で生計を立てていた。稲作が主であったが、副業には、炭焼きや養蚕なども行なわれていた⁽¹¹⁾。南多摩地域は、1878年11月郡区町村編制法により神奈川県に入った。さらに西多摩郡、北多摩郡と併せて三多摩の名称が生まれた⁽¹²⁾。稲城村が誕生したのは1889年であり、矢野口・東長沼・大丸・百村・平尾・坂浜の合併によって成立した⁽¹³⁾。奚疑塾の時代の稲城は人口の大きな変動がなく、都市近郊であるが農村としての性格を強く持っていた地域と考えられる。なお、稲城村はこの時期以後、現在の稲城市に至るまで区域に大きな変更はない。

稲城を含めた三多摩に関わる明治期の教育・文化活動をめぐる動きで注目すべきものは自由民権運動であろう。1874年の民撰議院設立建白書に端を発した自由民権運動は、三多摩では全国でも最も盛んに広がっており、1880年1月、八王子に政社第十五嚶鳴社が成立したことを機に民衆の動きが活性化する⁽¹⁴⁾。自由民権運動は、単に政治的運動にとどまるものでなく、教育との関わりが深かったことから、私塾をみる上でも避けて通ることはできない。教育史研究者の片桐芳雄は、自由民権運動を「国家の必要によって強権的に作り出されつつあるわが国の公教育に対して、まさにその成立時点において批判を加え、成立しつつあるそれとは異なる制度を希求する運動としての側面をもつものであった⁽¹⁵⁾」と日本教育史の視点から評している。自由民権運動の活動の幅は広く、純然たる学習運動や政治学習の結社や塾など、様々な形で教育と結びついていた。例えば、三多摩地域における自由民権運動では、西多摩の五日市における学芸講談会のような青年の学習運動があったことがその一つである⁽¹⁶⁾。

本研究で対象とする癸疑塾成立の背景にも、自由民権運動の影響をいくつか垣間みることができる。第1は、塾の支援者が自由民権運動の薫陶を受けていることである。例えば1878年に町田にて誕生した学習結社責善会と稲城の人々との関わりが挙げられる。責善会は、純然たる学習結社であったが、自由民権運動への導火線となり、地域ぐるみへ高揚する契機となった結社である⁽¹⁷⁾。責善会の呼びかけ人には稲城からも富永重侃、森素直が参加しているが、森素直は癸疑塾の支援者の一人として、癸疑学舎の開申書に創始者の窪全亮と共に名を連ねている⁽¹⁸⁾。

第2は、自由民権運動に影響された地域の人々が自らの子を癸疑塾で学ばせていることである。その例として稲城村の黒田尚雄の存在を挙げることができる。黒田は、南多摩郡自由党に参加し、平尾区域の自由黨員として活動をしていたが、子の黒田尚寛を癸疑塾で学ばせている。このような自由民権運動の影響を受けた人が、子どもを学ばせているケースが癸疑塾には少なくない。つまり、塾そのものは明確に自由民権運動の拠点であったわけではないが、癸疑塾の背景にはこうした自由民権運動の存在を確認することができる。

それでは癸疑塾の活動が始まった1880年代頃の稲城における就学率ほどの程度のものであっただろうか。『稲城市史』での調査によると、坂浜・平尾を地域とする稲城市域の小学校である、立志学校の就学率は1882年59.3%、1883年60.4%となっていた⁽¹⁹⁾。1882年の全国の就学率をみると48.51%、1883年は51.03%（1880年41.06%、1881年42.98%）の数値を示している⁽²⁰⁾。全国と比して、高い就学率の地域だったといえよう。ここから、稲城が教育意欲の高い地域であった可能性があることを推し測ることができる。癸疑塾の基礎には、長沼郷学校の存在を確認することができる。1871年に神奈川県は県内に対して、郷学校を寄場組合単位に設置することを指示し、「郷党仮議定・郷学校仮規則」を布達する。これを契機に、神奈川県下では郷学校の建営が進むが⁽²¹⁾、実際に設立された郷学校15校の中に稲城の長沼郷学校をみることがある。『日本教育史資料』三によれば、創立に協力した人物に稲城市域6ヶ村の有力農民の名が並び、そこには前述した長沼村の森素直や平尾村の黒田尚雄の名もある⁽²²⁾。長沼郷学校では癸疑塾創始者の窪全亮が教鞭をとっていることから、郷学校と癸疑塾とのつながりは深い。長沼郷学校の経費の項をみると「出納簿亡失ノ詳ナラス之ヲ更ニ據所ナシ今之ヲ憶測スルニ凡ソ百圓内外ナリシ但有志者ニ募リ一般人民ニ課セス⁽²³⁾」と記録されており、有志者によって支えられていた状況を伺うことができる。

以上、癸疑塾の成立背景としての稲城をみると、自由民権運動の影響を受けた地域であること、さらに就学率の高さなど地域ぐるみの教育への意欲がみられること、民権運動に影響を受けた有力農民が地域での教育活動を支えていたことなどを確認することができた。

2. 癸疑塾の教育

(1) 癸疑塾の概要

癸疑塾は、稲城・東長沼の私宅に、教育者・漢学者である窪全亮によりつくられた私塾であり、窪の私邸に1880年（明治13年）に開設された。設立当初は癸疑学舎の名称での構想だったが、後に癸

疑塾と名乗ることになった。塾の名称は陶淵明の帰去来辞、「樂夫天命復奚疑」（かのでんめいをたのしみてまたなにをかうたがはん）から命名されている。

奚疑塾は私邸に開かれた民間の私塾であるが、1913年（大正2年）、窪の死去により活動を終えるまで約30年に渡り多数の卒業生を生んでいる。奚疑塾の教育内容を確認できる史料のうち、概要を記したものは主に二つが現存している。その一つが1882年6月の奚疑学舎開申に関わる一連の史料群であり、もう一つは1882年以後に作成されたと考えられる「奚疑塾教課定則」である⁽²⁴⁾。以下、この二つの史料に基づき、奚疑塾の理念や教育内容をみていきたい。

（2）奚疑塾の基本的理念

奚疑塾は基本的理念に教育機会の拡大を志向していたことが挙げられる。奚疑学舎の開申書には、設置の目的が「小学学齡外ニシテ学資乏ク中学或ハ他ニ就テ学ヲ能ハサル子弟ノ為メニ設ク⁽²⁵⁾」と記されていることはその証左であろう。渡辺賢二は、このような奚疑塾の設置目的から、「窪全亮は能力ある者については、その学び成長する権利を積極的に容認し、その能力を開花させていこうとする子ども観をもっていた⁽²⁶⁾」と述べている。奚疑塾の学資に関するものをみると、授業料は「一ヶ月金三十銭 一ヶ年同三円六十銭」であったが、「但シ極メテ貧寒ノ者ハ定額ノ限りニ非ス⁽²⁷⁾」とも開申書に書かれている。3円60銭の授業料を他と比較すると、例えば1878年の牛込区の農作雇用賃金は3.17円（男）、1.25円（女）⁽²⁸⁾であり、必ずしも安価であるとはいえない。しかし、極めて貧しい者に対しては配慮をしたことが伺え、奚疑塾設立者の窪が広く教育の機会拡大を考えていたことが授業料の追記事項からは読み取れる。さらに「奚疑学舎教則」には「華士族平民ヲ論セス、総テ満十四年以上、小学学齡外ノ者ニ授ク⁽²⁹⁾」とも書かれており、少なくとも教育機会拡大の意味が塾には含まれていたことは推測することができる。

塾の理念には自己研鑽の重視があるが、それは奚疑学舎校則の生徒心得から読み取ることができる。例えば第十八項の「偽計妄談ヲナシ儕輩ヲ迷惑セシムル^(コト：引用者)アル可カラス一ニ誠實遜讓ヲ旨トスヘシ⁽³⁰⁾」、第十九項に「徒ニ世ノ利病ヲ論シヌ人ノ長短ヲ説ク可カラス一ニ己ヲ治ムルヲ以テ要トスヘシ⁽³¹⁾」と書かれている。このように奚疑塾では、自らの研鑽による学びを重視していたのである。「奚疑塾教課定則」の塾則五条の中にも「塾中之徒不可論世之利病又不可説人之長短一以治己為要⁽³²⁾」と開申書と同様に塾の生徒に対して、人の長所短所を論じるよりも自らを治めることを重要と説いている。奚疑塾では一貫して自己研鑽を重視していたことが伺える。

（3）奚疑塾の教育内容にみる人間形成

それでは奚疑学舎の教育内容はどのようなものであったのであろうか。教則等に書かれているものからは、かなり厳格な形で行われていたことがわかる。奚疑学舎教則の第一条第二項によれば「毎等學科ハ讀書習字トス 但修身作文歴史ハ讀書科ニ於テ修ル者トス⁽³³⁾」となっている。読書と習字で内容が構成されており、修身、作文と歴史は読書科で学んでいたようである。

さらに、第三条をみると読書は「第六項 読書 読書ヲ分テ讀法及作文トス⁽³⁴⁾」とあり、読法と作文に分けられている。同じく第六項において、読書は「読書ハ専ラ先句讀ヲ習ハシメ而シテ字義章句ノ意ヨリ学力漸進スルニ從ヒ獨見講述セシムヘシ」、作文は「日用書牘ヨリ逐次ニ記事紀行ノ和文體ヲ作ラシメ漸ク等ヲ進ムニ於テハ漢文序記題跋ヨリ論說小傳等ヲ作ラシムヘシ」とその内容が規定されている⁽³⁵⁾。いずれも、内容は学習が進むにつれて徐々に難しくなるようになっている。

奚疑塾は寄宿制を採用していたため、遠方の学生を受け入れることが可能になった。それに伴い塾の規則には、生活に関する規律を定めたものが多くみられるが、これを同塾における教育活動の特徴として挙げることができる。例えば生徒心得の中には「寄宿スル生徒」に対して、夜中の音読の禁止や、起床（6時）・就寝（22時）時限、門限（22時）から火鉢ランプの取り扱いなど、細かく規定が定められている⁽³⁶⁾。これらによって、奚疑塾は塾生の人間形成そのものに影響を与える存在でもあったことを推測することができる。

以上をまとめると、奚疑塾では自己研鑽の重視など、学問の習得の場であると同時に、塾生に自らの学びによる人間成長を期待していたことがわかる。

3. 奚疑塾の果たした役割

(1) 窪全亮の評価と稲城

奚疑塾が稲城で開かれたことは、奚疑塾の創設者である窪全亮の存在が非常に大きい。窪は教育者、漢学者、書家の三つの顔をもっていることから、塾を通しての地域とのつながりはもちろんのこと、さまざまな形で稲城に影響を及ぼしている。窪全亮は1847年（弘化4年）稲城の大丸に生まれた。年少時は、稲城の常楽寺で学業に励み14歳の時に上京、星野介堂、大沼枕山から漢学を、巻鷗州から書を学んでいる。故郷稲城に戻り、1871年（明治4年）常楽寺に開設された長沼郷学校、博文文学舎などで教師として活躍した。その後、1880年（明治13年）に奚疑塾を東長沼に設立し、窪は教員をやめ、その活動に専念している。窪は一貫して教育者として活躍したといえよう⁽³⁷⁾。

次に挙げられるのが、漢学者、漢詩人としての窪である。窪は字を肅卿、素堂と号し、多摩地域随一の漢学者として名声を博した。窪は江戸末期～明治前期にかけて活躍した漢詩人、大沼沈山に学んでいる。漢詩の批評を通して、溝口桂巖、小菅香村、嵩古香、森鷗村、小島慎斉・守政などと親交があったという⁽³⁸⁾。漢詩の繋がり、1883年10月～1884年11月にかけて発行されていた地元総合雑誌『武蔵野叢誌』からもみることができる。『武蔵野叢誌』は、稲城と隣接する北多摩郡府中の成文舎によって発行されていた。北多摩郡の「郡役所の広報誌」「政論雑誌」などさまざまな性格を持ち、漢詩や和歌などの文芸記事も充実していた地域の総合雑誌である⁽³⁹⁾。

この『武蔵野叢誌』の中には文芸欄があり、漢詩文、和歌、俳句が投稿されているが、稲城からも多くの作品が掲載されており、窪全亮や奚疑塾同窓生の作品もある⁽⁴⁰⁾。例えば漢詩文には東長沼の窪素堂（全亮）ら5名14作品が掲載されている。特に窪は9作品が入っており、例えば第四号に「謝_ス苔菴詞兄_{ノルハヲ}寄_ヲ武蔵野叢誌_ヲ併祝_{テス}其發兌_ノ」と題した漢詩文が寄せられている⁽⁴¹⁾。沈山門下の本

田苔庵との交流があったことを推察することができる。この他にも第十号には「喜雪」、第十三号には「春日」など窪の作品には自然を詠んでいるものが多い。さらに和歌には5名18作品が収められており、中でも東長沼の福島彌繼は11作品が掲載されている。例えば第五号「夜中、目」や、第九号「夕霞」等、情景を詠んだものが多い。これらの作品からは直接、塾の情景をうかがい知ることはできないが、窪の交友関係を通して、塾生の活動が広がっていることがわかる。

さらに窪は書家としても地域に多くの足跡を残している。墓碑やのぼり旗、扁額などが三多摩に広く所蔵されており、例えば稲城の矢野口穴澤神社の碑文や稲城の青渭神社の幟などがある⁽⁴²⁾。これらからみられるように、窪は文化人として高い評価を得ており、奚疑塾が地域で受け入れられるための土壌となっていたと考えられる。

(2) 地域における教育の場としての奚疑塾の役割

奚疑塾の同窓生数は、1910年3月調査の「奚疑塾同窓会会員名簿」によれば、総計で732名である⁽⁴³⁾（1913年まで塾が活動していたことを考えると、732名以上と予想される）。このデータからは、二つの特徴がみえる。一つは稲城の同窓生と共に、他地域出身の同窓生が多いことである。他地域出身者は約3/4を占めている。神奈川の民権運動研究に従事した小林孝雄の研究によれば、同窓生732名のうち、稲城出身者は183名（全体の約25.3%）である。地域ごとにみると、三多摩の出身者は534名（全体の約73.0%）、三多摩以外の近隣地域193名（全体の約26.4%）、その他地域は14名（2.0%）となっている。三多摩以外にも多くの地域の人々が奚疑塾で学んでいたことを示している。

さらに、奚疑塾には西には青梅や五日市からの塾生もいた。奚疑塾は寄宿制度のある塾であったが、そのことも塾生の出身が広範囲に及んでいた要因と考えられる。塾生の地域分布から、奚疑塾は稲城や周辺地域に住む人々にとっては地域の教育の拠点であったこと、さらに遠方からの学生にとっては「遊学」の為の教育機関であったことの、二つの役割を担っていたと考えられる。

女性の同窓生も学んでいたことを指摘しておきたい。1910年名簿の集計の中で総計732名中34名が女性、うち22名が稲城の出身であったことがわかっている⁽⁴⁴⁾。奚疑塾での男女の人数比について、差が大きいことは否めない。しかし少なくとも、地域の女子に対して開かれていたことは確かな事実である。具体的に女性の塾生が学んだ内容は、1986年に女性を含め3人の奚疑塾塾生に対して聞き取りが実施されている⁽⁴⁵⁾。そのうち、伊藤ノブ氏（明治23年生）、市川シズ氏（明治28年生）の通塾時期は明治30年代年頃にあたと推測される。伊藤氏の聞き取りからは「女の人が五・六人通って⁽⁴⁶⁾」いたことや、「塾では、本を読むことと、手習いとそろばん⁽⁴⁷⁾」をやっていたことなどがわかる。さらに、市川シズ氏の聞き取りからは、「小学を終えて、上級の学校にいかうとしましたが、坂浜あたりで、『ババア、ババア』といじめられていなくなり⁽⁴⁸⁾」、間もなく奚疑塾に入ったとの証言がある。市川氏は奚疑塾での学習を「自分で勉強が進めばむずかしいものにとりくむ様な仕組みでした⁽⁴⁹⁾」と述べているが、これは奚疑塾では自発性を重視していたことを示しているのではないか。同塾では出身地域や性別に関わらず教育を受けることができたことから、広く地域に開かれ

た教育の場の役割を持っていたことがわかる。

（3）青年のつながりを生んだ癸疑塾

次に同窓生の書簡などから、青年のつながりを生んだ癸疑塾の役割をみたい。同窓生で足跡が明らかにされている一人に平尾の黒田尚寛がいる。「對州巖原病院院長 醫學士」の肩書きで同窓生名簿に掲載されている黒田は、1871年生まれである。癸疑塾を出た後、第一高等学校、東京帝国大学を卒業し、医学士となっている⁽⁵⁰⁾。その東京在学中の黒田尚寛の書簡からは、癸疑塾出身の青年間で連絡を取っていた様子を見ることができる。例えば1874年生まれの同郷東長沼の森円蔵にあてた1890年3月の書簡では「貴兄者近頃癸疑へ御通学被也候哉伺上候、并せて癸疑之近況を御報知被下度候⁽⁵¹⁾」と、癸疑塾の近況について確認している様子が伺える。他にも1891年に1月31日に同じく森円蔵に宛てて、遊学中の近況報告と共に、「第二回癸疑塾同窓温知会」への不参加などを綴っている⁽⁵²⁾。ちなみに、癸疑塾同窓生活動は盛んに行なわれていた。1888年3月23日の「毎日新聞」雑報欄によると、18日に「癸疑塾同窓恩知会」が開催され、「來會者無慮百七十名の多きに及び楼上樓下立錫の余地なく⁽⁵³⁾」と盛況だった様子が記されている。さらに、黒田以外にも癸疑塾出身の東京の遊学者が存在していたことは、1896年5月の黒田尚寛の書簡からみることができる。「一同窓（癸疑）生新陳代謝大改革 嶋田、中島、市川、三氏土曜毎位に来る」など、7名の名前が挙げられている⁽⁵⁴⁾。こうした青年間のつながりは、癸疑塾あってこそ生じたものであり、これは塾の果たした役割として指摘できる。

稲城地域へ関わりを持った同窓生として森円蔵がいる。1874年生まれの森円蔵は、1885年4月に癸疑塾に学び、その後、癸疑塾での学問を打ち切り、1890年7月には慶應義塾に学ぶこととなる⁽⁵⁵⁾。しかし、森円蔵は病気により1891年1月に帰郷する。森円蔵の活動の中で特に注目されるのは、稲城へ帰郷後に与えた稲城への影響であろう。稲城に戻った森は後に、青年文芸グループ「吟韻会」「雄飛会」などの組織、さらに「稲城青年会」の結成などに中心的な役割を果たしている⁽⁵⁶⁾。

他に癸疑塾出身青年の関わりがみられる組織としては、1890年代の稲城各地の青年会の存在がある。稲城では、農事改良や学術研究、青年文芸グループなどの組織が生まれる。前述の「吟韻会」「雄飛会」の組織の他にも、1892年3月の「平尾青年談話会」、1892年8月に規約が成立した「坂浜鳳雛会」、1879年1月に誕生した「百村青年会」などがある⁽⁵⁷⁾。平尾青年会は「農事・養蚕改良への取り組み、夜学・俳句会を起こしての学術研究、教育・衛生に関する幻灯会」などを展開していた。ここには癸疑塾の具体的関与をみることはできない。しかし、地域の青年グループの結成に癸疑塾の同窓生が中心的な役割を果たしていた。具体的には平尾青年談話会の発起人の一人として鈴木静蔵、また「吟韻会」「雄飛会」の森円蔵などを事例としてあげることができる。このように浮かび上がってくる同窓生の書簡や、そこにある「癸疑塾同窓会」「同窓恩知会」「在京癸疑塾同窓会」などの存在から、塾が癸疑塾生のつながりを生む為の重要な役割を果たしていたと考えることができる。同窓会を通じて東京へ遊学した青年と地域の青年とが交流する媒介の役割があったことは注目に値しよう。

（4）その後の支持の広がり

奚疑塾は窪全亮が跡継ぎに恵まれなかったこともあり、窪死去に伴い閉塾するが、その後も地域に影響を残している。同窓会活動で窪の銅像が作られたが、それが「窪素堂先生銅像除幕式兼第十一回同窓恩知会」である。この会は窪没後の1916年3月16日に窪邸にて開催されている。「記念品寄附金及ヒ人名」によれば、掲載されている人物名は延べで528名、寄附金額にして512名分集まっている⁽⁵⁸⁾。ここからは、同窓恩知会への出席人数を知ることはできないが、少なくとも多くの人数がこうした趣旨に賛同していること、窪全亮が没した後も同窓会組織の活動があったことを伺える。窪全亮及び奚疑塾に関わる動きは、戦後にも展開されている。例えば1986年4月29日「窪全亮先生頌徳碑」が建立されている。窪全亮にゆかりのある人々が呼びかけ人となった「窪全亮先生頌徳碑建立發起人会」により、1984年から活動され、170名の寄付が寄せられている⁽⁵⁹⁾。

以上、奚疑塾が地域に与えた影響からその役割をとりあげた。奚疑塾の活動が、同窓生ばかりでなく、稲城を中心に地域の人々により広く支持されていたことを示していることがわかったが、こうした人々の支持があったからこそ、奚疑塾は三多摩地域に根ざした活動を展開することができたと考えることができる。

ま と め

本研究は、近代の一私塾を取り上げ、地域において展開された学習活動の取り組みについて、地域通俗教育としての視点から検討を行うことを試みた。1. では、奚疑塾開設時期の私塾および、稲城の背景の考察を行なった。奚疑塾の成立背景には自由民権運動の影響が少なからずあったことや、地域の郷学校が存在することがわかった。その郷学校は地域の有志によって支えられていたことをみることができた。2. では、奚疑塾の教育内容を中心に検討し、教育の目的や理念などから奚疑塾の教育を考察した。そこでは、人々の教育の機会拡大、自己研鑽の重視が志向されていたことなど、自ら学ぶことで人間成長を期待していた塾であることがわかった。3. では奚疑塾が多くの同窓生を輩出したことや、同塾は三多摩を中心に広く塾生を集め、女子教育の一翼を担っていたことがわかり、地域の教育拡大に寄与している塾であることが明らかになった。さらに塾生がそれぞれ自主性を持ち、学習に取り組む形式でも教育が行なわれていたことを本稿では示した。奚疑塾生の書簡や青年会からは、青年同士のつながりがあったことがわかった。以上から奚疑塾は稲城を中心に地域における拠点的な機能を担い、人々が交流する要の役割を果たしていたと考えられる。

本研究での検討を通じて、同塾は地域における通俗教育機関として、地域の教育の機会拡大に重要な役割を果たしていたことを認めることができる。特に、東京への遊学が盛んだった時期にも関わらず、東京都心部以外であった奚疑塾に多くの青年が学んでいた点は特筆すべきと考えられる。

なお、本研究の今後の課題に挙げられるのが、同窓生の足跡のより詳細な追跡である。中でも、奚疑塾を受講していた女性の同窓生の歩みを明らかにする必要があると思われる。奚疑塾において学ぶことの意味の究明、例えばいわゆる「良妻賢母」教育の内実を検討することによって、奚疑塾の役割

がみえると考えられる。さらに、地域の青年会や夜学会とのつながりを究明することも重要である。癸疑塾では漢学、書道などの教養的な教育が行なわれていたようであるが、例えば平尾青年談話会の会則第三条「実業及學術ノ研究又ハ討論ヲ為シ、其発達ヲ図ルヲ以テ目的トナス⁽⁶⁰⁾」にあるような、実学の教育との関係を明らかにしていくことが、今後に残された課題である。

注(1) 松田武雄『近代日本社会教育の成立』九州大学出版会、2004年、p. 142。

- (2) 渡辺賢二「南多摩地域の中での戦後稲城の特徴」〈稲城市文化財研究紀要〉第2号、稲城市教育委員会、1999年3月、渡辺賢二「戦後初期の青年たち」〈稲城市教育委員会編稲城市文化財研究紀要〉第6号、稲城市教育委員会、2004年3月、稲城市編集発行『稲城市史』下、1991年、『窪全亮先生と癸疑塾 窪全亮先生 頌徳碑建立委員会、1986年など。
- (3) 「南多摩地域の中での戦後稲城の特徴」前掲、p. 78。
- (4) 小林孝雄「民衆文芸の創造と川崎」『神奈川の夜明け—自由民権と近代化の道』（第二版）、多摩川新聞社、1994年。
- (5) 多田仁一『在村文化と近代学校教育—多摩地域等の事例から—』、文芸社、2001年。
- (6) 小久保明浩『塾の水脈』武蔵野美術大学出版局、2004年。
- (7) 『塾の水脈』前掲、p. 131。山形悌三郎の塾（埼玉県）、田尻稲次郎（北雷）の塾（小石川区金富町）1880年、坪内逍遙の逍遙塾（本郷区真砂町）1884年などが挙げられている。
- (8) 東京都教育研究所編集発行『東京都教育史通史編』一、1994年、p. 549。漢学を教授していたのは1585校中、676校であった。
- (9) 文部省編『日本教育史資料』八、1892年、pp. 270-271。
- (10) 『東京府統計書』東京府、1893～1908年。
- (11) 『稲城市史』下、前掲、pp. 755-756。
- (12) 松岡喬一編著『多摩近現代史年表』たましん地域文化財団、1993年、p. 20。1978年五日市村・小中野村が連合編成、小和田村・留原村・高尾村が連合編成（明治村）、八王子・横山・八日市・八幡4宿が合体して八王子町に、五日市村が五日市町に、田無村が田無町になどの動きがあった。
- (13) 『稲城市史』下、前掲、p. 217。
- (14) 松岡喬一『年表に見る八王子の近現代史』かたくら書店新書、2001年、p. 24。
- (15) 片桐芳雄『自由民権期教育史研究』東京大学出版会、1990年、p. 2。
- (16) 色川大吉編『三多摩自由民権史料集』大和書房、1979年。
- (17) 町田市教育委員会編集発行『町田市教育史』上巻、1988年、p. 88。
- (18) 「私立学校開申」1882年6月。
- (19) 『稲城市史』下、稲城市、1991年、p. 168。
- (20) 日本統計協会編集・発行（総務庁統計局監修）『日本長期統計総覧』第5巻、1988年、p. 212。
- (21) 神奈川県立教育センター編『神奈川県教育史通史編』上巻、神奈川県弘済会、1978年、p. 355。
- (22) 文部省『日本教育史資料』三、1890年、p. 364。
- (23) 『日本教育史資料』三、前掲、p. 365。
- (24) 「私立学校開申」1882年6月。「癸疑学舎教則」「癸疑学舎校則」「小試業課程表」などからなっている。「癸疑塾教課定則」は年月日が記載されていないが、癸疑塾の名称を名乗っていることから、「私立学校開申」より後に作成されたと考えられる。
- (25) 「私立学校開申」1882年6月。
- (26) 「南多摩地域の中での戦後稲城の特徴」前掲、p. 76。
- (27) 「私立学校開申」前掲。
- (28) 『東京都教育史』通史編1、1994年、p. 341。

- (29) 「癸疑学舎教則」, 「私立学校開申」, 1882 年 6 月。
- (30) 「癸疑学舎校則」, 「私立学校開申」, 1882 年 6 月。
- (31) 「癸疑学舎校則」前掲。
- (32) 「癸疑塾教課定則」年月日不明。
- (33) 「癸疑学舎教則」前掲。
- (34) 「癸疑学舎教則」前掲。
- (35) 「癸疑学舎教則」前掲。
- (36) 「癸疑学舎校則」前掲。
- (37) 『稲城町誌』稲城町, 1967 年, p. 245。教員の辞任は 1885 年 6 月。
- (38) 渡辺賢二編「資料にみる窪全亮先生と癸疑塾」解説, 『窪全亮先生と癸疑塾』窪全亮先生頌徳碑建立委員会, 1986 年, pp. 101-103。
- (39) 「二〇〇二年度第二回企画展『武蔵野叢誌』一八八三年秋, 創刊! 一自由民権期の地域雑誌一」の記録, 町田市立自由民権資料館編『「武蔵野叢誌」一八八三年秋, 創刊! 一自由民権期の地域雑誌一』町田市教育委員会, 2003 年, p. 2。
- (40) 遠藤吉次「解説」, 府中市立郷土館編『武蔵野叢誌』下, 府中市教育委員会, 1978 年。1884 年 5 ~ 11 月に成文舎より発行復刻, pp. 396-408。
- (41) 窪素堂「謝^ス三^{ノル}若菴詞兄^ヲ寄^テ武蔵野叢誌^ヲ併祝^ス其發兌^ヲ」〈武蔵野叢誌〉第四号, 成文舎, 1883 年 10 月, p. 20, 『武蔵野叢誌』下, 前掲。
- (42) 磯川豊一「素堂先生の文化遺産 碑と幟」, 『窪全亮先生と癸疑塾』前掲, p. 16。
- (43) 「癸疑塾同窓会員名簿一覧」1910 年, 『窪全亮先生と癸疑塾』前掲, pp. 70-86。
- (44) 「癸疑塾同窓会名簿一覧」1910 年。
- (45) 「塾生による癸疑塾回想」1981 年 6 月 15 日に市川氏宅にて実施（聞き手：馬場亀三郎氏, 浜住氏, 渡辺賢二氏）聞き取りのまとめである。『窪全亮先生と癸疑塾』前掲。
- (46) 「塾生による癸疑塾回想」, pp. 30-31。
- (47) 「塾生による癸疑塾回想」, p. 31。
- (48) 「塾生による癸疑塾回想」, p. 32。
- (49) 「塾生による癸疑塾回想」, p. 32。
- (50) 黒田尚寛氏の東京遊学については, 『稲城市史』下, 前掲, pp. 258-260 にて明らかにされている。
- (51) 「勸業博覧会へ誘う黒田尚寛書簡（森円蔵宛）」1890 年 3 月, 稲城市編集発行『稲城市史 資料編』3 近現代 I, 1997 年, p. 458。
- (52) 「東都遊学中の近況及び癸疑塾同窓温知会につき黒田尚寛書簡（森円蔵宛）」1891 年 1 月, 『稲城市史 資料編』3 近現代 I, 前掲, pp. 459-462。
- (53) 『毎日新聞』1888 年 3 月 23 日。
- (54) 「一高在学中の近況及び癸疑塾同窓生につき黒田尚寛書簡（加藤梁吉宛）」1896 年 5 月, 『稲城市史 資料編』3 近現代 I, 前掲, pp. 463-466。
- (55) 『稲城市史』下, 前掲, p. 261。
- (56) 『稲城市史』下, 前掲, p. 263。
- (57) 『稲城市史』下, 前掲, p. 268。
- (58) 「窪素道先生銅像除幕式兼第十一回同窓恩知会開催通知資料」1916 年 3 月 3 日, 『窪全亮先生と癸疑塾』前掲, p. 107。
- (59) 「窪全亮先生頌徳碑建立趣意書及建立経過」, 『窪全亮先生と癸疑塾』前掲, pp. 126-143。
- (60) 「平尾青年談話会の会則」年不明, 『稲城市史 資料編』3 近現代 I, 前掲, p. 526。

A Study of a Private School Engaged in Popular Education in Local Areas: Focusing on Keigi-Jyuku

Kentaro Kawahara

The purpose of this study is to consider the role and the significance of popular education in local areas by taking a private school called Keigi-Jyuku as one example. Shi-Jyuku (private schools) were popular during the Edo period as educational institutions. During the Meiji Period, some of them were still left, and some new Shi-Jyuku were established even in the following period in order to expand learning opportunities.

This study focuses on a particular private school, 'Keigi-Jyuku', in modern times. The school was located in the Inagi area of San-tama district, on the west side of Tokyo, from 1880 to 1913. The reason why Keigi-Jyuku should be useful to analyze is as follows. One reason is the distinguishing feature of the district. Although Inagi was a farm village, many students attended the school in fact. The school was also deeply rooted in the local community. The other reason was the educational philosophy of Keigi-Jyuku. The school was open to every student.

Keigi-Jyuku stated in its objective that "the school is established to provide education for children above elementary school age, that is young people of middle school age and higher, who cannot afford to go to school [Shougaku Gakurei Gai Ni Shite Gakushi Toboshiku Cyuugaku Aruiwa Hoka Ni Gaku Wo Atawasaruru Shitei No Tameni Mouku]" (Private School Opening State [Shiritsu-Gakkou Kaishin], July, 1882), and the school aimed to expand educational opportunities for such people in the local area. That is why the school worked effectively for people who did not have the opportunity but had a strong will to study.

This study is composed of three sections. In the first section, the background of the establishment of Keigi-Jyuku is described. In the following section, the second section, the meaning of educational activities by Keigi-Jyuku is clarified. Lastly, in the third section, the role of Keigi-Jyuku in the local area is discussed. Keigi-Jyuku could be thought of as the flagship of popular education in Inagi and surrounding western Tokyo.